

サイタマなしのワンパンマン

黒だんご

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンパンマン世界に転生した男。

モテるために筋トレして最強の力を手に入れてやるぜとか思っていたが、ふと新聞を見るとサイタマ（22）がカニランテとの戦闘により死亡との記事が。

彼は生き残ることができるのか。

目次

バタフライ効果	1
ガロウを煽る計画	17

バタフライ効果

俺は元地球人。死んだ記憶はないが、ある日知らない場所で産声を上げていた。

両親はふつうの日本人、と言つていいのかわからないが、顔は日本人。俺もおそらく平凡な顔に成長するのだろう。

この世界に国はなく、AからZの市がある。言語は日本語しか存在せず、金髪の娘も黒いおっさんも大陸の端から端まで日本語を話す。このご都合具合はマンガやアニメ世界だろう。そう予想していたが、調べてみると正解だった。ここはワンパンマンの世界だ。怪人が出現しているし、その災害レベルが神、竜、鬼、虎、狼となっている。この表現方法がワンパンマンだ。また、この世界の世界地図の大陸部分をよく見れば埼玉県に見える。

人の顔は村田版だ。美人率が高くて顔が縦長い。と言つても3次元と2次元で見え方が違うがな。

ワンパンマン世界となつたら、俺のやることは1つ。筋トレだ。そして人知を超えた力を手に入れてやる。サイタマとは言わなくとも、スイリユーレベルの力を手に入れたらかなりモテるからな。ヒーローとなつて怪人をやつつけるのもおもしろそうだし。

サイタマのような命がけの戦いはできないかもしれないが、黒光りみたいに余裕のある勝利でも救われる人はいるのだし許してもらいたい。俺はこの世界を楽しめればそれでいいんだ。

問題は筋トレの時期だ。早ければ早いほど強くなれるとは思うが、やり過ぎると身長が伸びなくなるかもしれない。かと言って遅すぎると原作が始まってしまふ可能性もあるからなあ。今が原作のどの時期か分からないから、安全を考えると早めにやっつけておきたい。ワクチンマンとか巨人弟とか怖いし。

よし、もういい。今すぐやるか。黒光りみたいに筋トレで巨大化した例もあるしな。まあ赤ちゃんだから、人より多めにハイハイしてみよう。それでも筋トレになるだろう。

俺はあまり意志が強くない、ほどほどの筋トレになっていた。しかし赤ちゃんとしては驚異の力を手に入れ、両親を驚かせることになった。勉強はほどほどに手加減していたので、天才だが鬼才ではない程度。

3歳で保育園に入園。腕立て伏せ100回、上体起こし100回、背筋100回を達成。しかしランニング10キロは無理だ。1キロが限界。毎日やるのも無理だ。2日置きが限界。もつとも、他の園児と比べれば圧倒しているが。かけっこや腕相撲ではないも断トツ一番。だいたい3つ上の平均的な子どもと同じくらいの実力だ。

それからトレーニングの日々は続く。5歳にしてランニング10キロを達成。戦鬪を見越して格闘の練習も始める。サンドバックを殴ったり、拳を鍛えるために素手で畑を耕したり。しかし、筋トレはサイタマ式をやめて、できるだけ重い負荷でやるようにした。黒光り式だな。だってサイタマ式で強くなるような気がしないのだから。彼は怪人と戦う経験値と怪人に物怖じしない心の強さがあつたから強くなれたのだと思う。俺のような高みの見物派は黒光り式がいいと思う。

6歳で小学校に入学。この頃になると筋肉が目に見えて膨らみ始めた。スクワットやベンチプレスの持ち上げられる重さも急速に重くなつていく。四月に30キロ、八月に35キロ、十二月に43キロ、次の四月には60キロ。

そして12歳。小学校を卒業する頃には1500キロのスクワット、700キロのベンチプレスが可能になつてた。ただし、いつの間にか身長が止まつてしまつて、黒光りして、その上ハゲてしまつたが。タツマキ、クロビカリ、サイタマ。3人のギャグ補正を手に入れてしまったわけだ。容姿は残念になつたがその分強くなつたと信じていた。まあ気にすることはない。この世界は強ければモテるはずだからな。実際小学校でも、女子たちがかわいいと言つて俺のつるつるの頭を撫でていたしな。

そして中学校入学。俺は目立つので、入学の初日から先輩の視線は感じていた。しかし登校わずか一週間で、不良の先輩に囲まれるとは思わなかつた。

「おいハゲチビ。なんでてめえハゲなんだ？ 病気か？」

「くつくつくつく。病原菌め。きもいんじや死ぬ！」

などと言われて、ムカついたのでボコってやった。ヒーローは一般人を襲わないって？ いや、俺ヒーローじゃないから。ちやほやされたいだけだから。

先輩方は次の日、また次の日もやってきた。それからしばらく日を置いて、番町っぽい男が自分を引き連れてやってきた。自分の大半はいくら俺が強くても番町には適わないと思っているようだったが、一部はめちやくちや恐れている自分もいた。俺にボコられた先輩や、俺と小学校が一緒だった先輩がそうだ。

結果はまあ、俺が番町を一方的にボコって終わりだ。それでも本気出すと死んじゃうからめちやくちや手加減してただけだな。

そうしてまた日々は過ぎていく。夏休みの頃には筋トレの重さが2トン、軽の自動車なら軽々と放り投げられるほどになっていた。完全に人間をやめていると思う。

そんな俺の前に、ブタ貯金箱の怪人が現れた。

「小銭出せ！ 小銭入れろ！」

「きやああああ！」

怖くなかったと言えば嘘になる。しかし女子の悲鳴はそれ以上に勇敢さを与えてくれた。

戦わなければモテない。せっかくの筋肉なんの役にも立たない。この怪人はどう見ても俺が修行の一環として上に投げて自分で受け止めているトンのバーベルよりもしよぼい突進力。当たっても死にはしない。だったら戦う選択肢しかない。

「小銭出せよ！」

「いやだね。お前みたいな雑魚に従う義理はない」

「なんだとお！」

俺が小銭を断ると、ブタ貯金箱は突進してきた。俺も覚悟を決めて突進した。

そして、衝突。パギヤーンというガラスが割れたような音と共に、刺すような痛みが全身を襲う。

「いてててて」

予想通り貯金箱の突進の威力は大したことなかった。ちよつと痛いくらいだ。ただ、割れた破片が皮膚を切り裂いてしまつて、そつちの方が痛かった。

サイタマヤクロビカリと違って、俺の体は斬撃に耐える硬さを持っていないようだ。

その日から、俺はより実践を見越した対怪人戦闘トレーニングを行うようにした。具体的には、皮膚を硬くするために岩にぶつかつてみたり、熱に強くなるために真夏の砂浜で横になつてみたり。

しかし、修行の度に病院送りになるだけだった。硬いものが当たると皮膚が切れる。熱なら火傷。一般人と同じだ。

今までの修行と違い、何度やっても耐性がついていかないかのようだった。それが当然なのかもしれない。人間は科学的に硬さや熱耐性に限界がある。サイタマやクロビカリがおかしいのだ。もちろん俺が2トンの重さを持てることも十分非常識ではあるが、斬撃や熱はもつと根本的におかしい。こういう常識があるために人間の殻、リミッターを外せないのかもしれないが、頭の中でこれ以上非科学的なトレーニングをしても意味がないと悟ってしまった。何より熱いとか痛いとか苦しい思いをしたくない。

俺は斬撃や熱の訓練を諦めた。その代わりに、筋トレ、スピードトレ、格闘技術に力を入れることにした。

そして3年が経ち、高校に入学する。

俺はパワーばかり増えていて、スピードがあまり増えてないことが気になっていた。そこでいろいろな工夫したり試してみたのだが、結論として、俺は2足より4足の方が速いことが判明した。

俺は身長133センチしかないが、体重は100キロある。手足は短く、クマのような体格だ。2足で走ると短い足のせいですぐに転びそうになる。だが4足なら、筋力を十分に使える。試しに100mを比べると、2足で8秒9、4足で5秒6だった。一気

に改善されたのだ。しかしまだまだ速くなりそうな感覚がある。

俺は4足走法を極めることにした。そのためには動物っぽい勘が必要だと思ったので、山でトレーニングすることにした。放課後は毎日山に行き、野山を駆け回った。そうすると本物のクマに遭遇してしまうこともあったが、ふつうに俺の方が強かった。

高校3年の頃、テレビで異種格闘技大会を見た。優勝者は俺と同年代くらいに見える男。スイリユ。原作キヤラだ。

この頃から強さはすさまじく、全試合楽勝だった。また、彼の技は美しく、見るものを魅了した。とてもモテていた。

俺もああいう風にモテたい。そろそろ彼女が欲しい。肉体の性欲はなく、精通の気配もないが、気持ちの問題だ。女性とくつつきたいという。しかし、さすがの俺も、スイリユにはまだ勝てない感じがした。確実に勝つために格闘技を本格的に習うべきだと思った。だとすれば、流水岩碎拳が一番いいだろう。後々のことを考えてもガロウやバングと知り合いになっておくのは悪くない。

大学入学と同時に流水岩碎拳の道場を尋ねた。険しい山の上にあっただが、山登りは毎日やっていたので俺には大したことのない距離だった。

「ほう？ 子どもがよく一人で登ってこれたな。何よりその歳で素晴らしい筋肉だ。入門希望か？」

道場の先輩方は俺を小学生だと思っていた。背は低いし、顔も幼いからな。筋肉はあるが、赤ちゃんみたいにプニプニだし。どうしても幼く見える。

「はい、入門希望です。ただし私は18歳です。鍛えすぎたためか背が伸びなくなつて」「ん!? 本当か!？」

先輩方はとても驚いていた。半信半疑の人もいたが、納得とかホツとしている感じもあつた。小学生が山を登れてしまえば、その小学生の才能は先輩方を遙かに上回る事になつてしまう。そういう相手には嫉妬せざるをえないが、18歳の鍛え抜いたチビなら逆に同情がわくのだ。チビは身長という才能に見放された人間だからな。

なお、髪については、ハゲだと思われていない。修行のために坊主頭になっていると思われている。俺の口からハゲだと言わない限り誰も疑わない。こういう場所では坊主頭は珍しくないからな。

「こんにちは！ おなしゃす！」

そしてバングと初対面。体育会系っぽい挨拶。

「ほう。気合が入つとるな。入門希望か？」

「はい」

「そうかそうか」

バングも俺を小学生のように見て、にこにこ笑っていた。バングくらいの歳になれば

小学生も大学生も変わらないかもしれないが。俺の歳を聞いた時は驚いていたけどね。

入門当初は筋トレや雑用が中心と言われた。俺は初心者グループに入れられた。ガロウは11歳らしくちっちゃいが上級者のグループにいた。

俺達は若い先輩に連れられ、道場の外に出る。バケツを1人2つずつ持って小川へ出る。まずは水汲みを行うらしい。

「ふっふっふ。どうだ？　これはただの水汲みではなく、修行なのだ。7リットルのバケツを両肩に背負い、水をこぼさぬよう、岩場を歩く。筋力とバランス感覚の基本がなければできないぞ？」

俺には非常に不利だった。足が短いので岩場を飛んで移動しなければならず、どうしても水が漏れてしまう。

「ははは。ただ大きいだけの筋肉ではマイナスだということだ。自己流の筋トレで無駄な時間を過ごしな」

「そうですね。ご指導ありがとうございます」

顔のデカい先輩が俺を見て笑っていた。うっとうしいがボコるわけにはいかない。

この男、ニガムシという名前だ。原作で見たような気もする。いや、気のせいかな。

水汲みは零し続けて終了。ただし体力は一番あつたぞ。

水汲みの後は雑巾がけ。これは俺の独壇場だ。普段から四足で走ってる怪物だから

「二足歩行の人間ではまるで相手にならないぞ。」

「な、何?」

「速すぎる! 目が追いつかん!」

「や、野生だ! 動きが完全に野生だ!」

先輩方は目が点になっていた。素人に対して実力の差を見せつけ、しようもない自尊心を満たしたかったのだろうが、その計画は崩れ去った。

「ふ、ふん! あいつは手足が短いから有利なだけだ!」

「あいつは犬だ! いや、ブタだ! 人間っぽくないからああいうことができるのだ!」
先輩方は俺を嘲ることでプライドを守っているようだった。俺は内心でにやにや笑っていた。

このように雑用をしつつ、型、バランス、受身を学んでいった。

半年して、やっと短い足でもバケツの水を零さないバランス感覚を手に入れることができた。そして2年後、素人グループの中では最速で模擬戦をやらせてくれた。相手はなんと、13歳のガロウだ。思春期で一気に背が高くなった。

「チツ、爺め。なんで俺がガキ相手に」

「ガロウ! やっちまえ!」

「ボコボコにボコレ!」

先輩方は才能溢れる俺が気に食わないようだった。俺がやられるのを期待している。俺は、喜ぶべきか悲しむべきか微妙なところだ。雑魚先輩相手に完勝してストレス発散もいいが、ガロウに負けて学ぶのも一興。

「始め！」

そして試合が始まった。ガロウは流水岩碎拳の構えを取る。俺もまだ素人の域を出ないがほぼ同じ構え。

流水岩碎拳。

うわ、速い速い速い。目が全然追いつかない。てか目の近くに手が来るせいで驚いて目を瞑ってしまふ。全く見えない。攻撃自体はほぼ効いてないけどね。

「くっ」

と、知らぬ間に足をかられていた。自慢の筋肉を發揮する間もなく、転ばされる。

「ふん」

鼻で笑うガロウ。

目を開けると、ガロウは俺に跨り、首のところで主刀を寸止めになっていた。

「そこまで！」

バングの声で試合終了。

「よっしゃー！」

「いいぞガロウ！」

先輩は大喜び。ガロウは不満げだ。頭をかきながら舞台を出ようとする。

「チツ。こいつに勝つてもなあ」

「待てガロウ」

しかし、そんなガロウをバングが呼び止めた。

「なんだ？」

バングはガロウに答えず、俺を見る。

「まだいけるじゃろ？ もう一戦じゃ」

お、やらせてくれるのか。ちょうどいい。消化不良だったんだ。

「はい！ やります！」

それから俺は、ガロウに一方的に攻撃され、何度も何度も転ばされた。

純粋なスピードとパワーは俺が勝っているかもしれないが、技量と実戦経験が違い過ぎた。攻撃が全く当たらない。全てかわされるか受け流される。これが流水岩砕拳かという感じだ。おもしろい。

「はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ。もう一回お願いします！」

「おいテメエ！ いい加減にしろよ！ お前の攻撃なんて全く当たらねえ。俺にとつ

ちや何の修行にもなんねえんだよ！」

何度目の挑戦だろうか。ガロウがとうとう反発し始めた。

「やれ、ガロウ」

「おい！」

「やれ」

「チツ」

ガロウは嫌がるが、バングも譲らない。何か狙いがあるようだ。俺の姿を見て初心を思い出せとかそんな感じかな？ 俺にとっては実戦経験が積めるだけありがたい。

それから何度も模擬戦を行った。二人とも汗だくで、動きが鈍っていく。特にガロウは消耗が激しい。

「ぐっ」

「やった！ 当たった！」

そしてとうとう、俺の攻撃がガロウに当たった。指が肩に掠っただけだがガロウは大きくよろめく。

その隙に張り手。

「しまっ、ぐはっ!?!」

張り手は気持ちよく命中。ガロウは激しく壁に叩きつけられた。

「それまでじゃー！」

そして試合終了。俺は気持ちよく一日を終えることができた。

「ちよつ、待てよ爺い！　なんで俺が油断して失敗したら終わりなんだ！　不公平だ！」

「負けは負けじゃよ」

「負けてねえ！　実践なら何度も殺している！」

ガロウはバングに不平を言うが、バングは取り合わない。たぶん最近ガロウが怠けているから濁を入れたかったのだろう。

ガロウはバングと俺を強く睨み「クソ！」と言つて去つた。

それから俺とガロウの奇妙なライバル関係のようなものが始まつた。基本的にガロウが勝つのだが、体力は俺が上なので、俺が技を学ぶたびに差が縮まっていく。始めは一方的な試合だったものが、徐々にいい勝負なっていく。ガロウでもなかなか仕留められない。というか試合形式だからガロウが勝つのであつてガロウの攻撃は俺のダメージになつてないからな。

ついにはある日、その試合でも俺が勝つ。プライドを傷つけられたガロウは、死にもの狂いで修行する。また俺は勝てなくなり、差がつき始める。差がついたガロウは満足し、怠け始める。また差が詰まつて、一回だけ俺が勝つ。またガロウが本気で修行する。そんなある日のこと。バングが俺とガロウに一枚のチケットを見せてきた。

「スーパーフアイトつちゆう異種格闘技大会があるんじやが、道場に宣伝にお前達どちらか出てくれんかの」

ガロウは一瞬俺を見た。

「ふん、宣伝なんてゴメンだぜ。お前が出る」

「よいかね。チバくん」

「よろこんで！」

やったぜ。ここから俺のモテモテ街道が始まるんだ。

会場は思ったよりもずっと広く、大勢の観客に包まれていた。

一回戦はどうしても緊張してしまっただが、相手が弱かったのでワンパンで楽に勝てた。というか決勝まで全部ワンパンで終わってしまった。やはりガロウやスイリユーが出なければ大したことない大会なのだろう。スネックさんでもベスト4の常連だしな。

優勝した俺はかわいい女の子達にキヤーキヤー言われた。握手してください、頭を触らせてください、等々。俺はできるだけだけかわいい女の子を狙って要求に応じていった。そして一人の女の子に狙いをすまし、こそつと耳打ち。

「きみかわいいね。暇だったらこれから遊びにいかない？」

「え、暇だけど。いいの？」

ガロウを煽る計画

ワンパンマンの敵は強すぎる。基本的にサイタマがいなければ何度も滅亡していたかもしれないくらい、ヒーローと怪人に力の差があるんだ。ワクチンマン、巨人弟、隕石、ボロス、覚醒ガロウ、怪人王、神。

特にボロス戦で地球が終わる。あいつの必殺技で地球の表面が吹っ飛ぶ。それを防ぐためには、大急ぎで効率的にヒーロー側を強くしなければならぬんだ。

ボロス程の相手では戦えるメンバーは限られている。覚醒ガロウ、タツマキ、ブラスト。特に原作者曰く覚醒ガロウはボロスと互角のようだし、ブラストはサイタマっぽい雰囲気があるので楽勝の可能性さえある。しかし、勝てる確信できるわけではないし、何よりあの必殺技が出てしまったら止められないのだ。その場に戦士がいなければ。

一番使えそうなのは、たぶんガロウだ。あいつは本音ではヒーローになりたいのだから、ボロスが無差別殺人していることを知らせて、ついでに子どもの死体写真でも見せれば、飛んでくるだろう。問題は覚醒のタイミングか。できるだけ早い方がいい。俺も襲われる可能性はあるし、ヒーローが全滅する可能性はあるが、結局あいつは1人も殺

さないからな。そんなに怖がる必要はない。

次に使えそうなのはタツマキ。あいつは基本的に暇で人助けが好きだからな。連絡すればくるだろう。問題はボロス相手にどこまで戦えるかだ。

最後にブラスト。強さは一番かもしれないが、連絡の取りようがないのが問題だ。

あと、俺もひよつとしたらサポートくらいはできるかもしれない。現在、試合ではガロウに勝てないが、実践ではいい勝負だと思う。俺はガロウの攻撃でほとんどダメージを受けないし、四足移動術は使っていないからな。

俺が四足を極めると、サイタマのハゲ、クロビカリの筋肉、タツマキのチビさ、番犬マンの四足というワンパンマンの4大ギャグ補正を手に入れることができるのだ。その上で流水岩碎拳の達人となればS級ヒーローでもかなり上位になるだろう。

とりあえず、ガロウの覚醒を早めるのを最優先にしつつ、タツマキをいつでも呼び出せるようにヒーロー協会やフブキともコネを作っておく。俺自身のトレーニングもできるだけ頑張る。こんな感じでいいだろう。

ガロウ覚醒の条件だが、おそらくヒーロー狩りは必須だ。サイタマがヒーローごっこを始めたように、ガロウも怪人ごっこを始めたのが強くなる契機のように、サイタマが語っていた。その上で不細工なガキを助けるパターンがあればいいな。これは運が必要だが。

ヒーロー狩りのためには、道場を辞めてもらわないといけない。道場を辞める条件は、ガロウが流水岩碎拳をマスターし修行は意味がないと思いつくこと。それとバングがヒーロー活動を増やして道場を空け始めること。

おそらく今のガロウは俺の影響で原作よりも強くなっている。だからふつうに行けば原作よりも早く辞める。ただ、俺がライバルになつてしまつているために、道場に残る理由となつて暴走が遅くなるかもしれない。それはよくない。だから俺も、バング以上にヒーロー活動に精を出して、わざとガロウを無視しようと思う。女遊びにうつつを抜かしたりして。それでガロウは幻滅し、道場を辞めるはずだ。すまんガロウ。

よし、こんな感じでいけるはず。

というわけで、俺は「就職活動を優先したいので」と言つて、道場を休みがちになつた。本当の目的は就職活動ではなくガロウ無視だがそれを口にするにはできない。

俺の就職予定はヒーローだ。金払いがいいし、モテるし、S級くらいになれば召集を無視しても許されてるからな。せつかくこの世界に来たのだからこういう仕事がいい。ヒーロー協会が潰れたら格闘家になればいいだろう。

というわけで、受験に向けて勉強を頑張る。修行はもちろん継続。筋トレと『四足歩行と流水岩碎拳を組み合わせる練習』を中心に頑張る。

そして数カ月後。記念すべき第一回ヒーロー試験が始まる。

第一回ということもあり、会場はとんでもない数の受験者でごった返していた。とりあえずアマイマスク、クロビカリ、プリズナーは見つけた。目立っていたからな。他にもいるだろうが、人が多すぎて見つけにくい。

試験はまず体力試験から。

反復横とび、1500m走、砲丸投げ、重量挙げ、もぐら叩き。

俺は全て常人を遥かに超える数値を叩き出した。いつしか俺やクロビカリの周りに人が集まり、見世物のようになっていた。

試験官に聞いた所、俺は砲丸投げだけ一位で、他は二位だそうだ。重量挙げはクロビカリに負けたのだと思うが、スピード系でも負けたのは意外だった。アマイマスクが一位か？

筆記試験も終わり、しばらくすると、結果の封筒が届けられる。俺はもちろん合格だ。成績は体力が50点、筆記が47点。ヒーロークラスはAだ。まだこの頃はSがないAでも一番上だな。

その後、合格者は講習に呼ばれた。

「君達ヒーローはA級、B級、C級に別けられ、激しい競争にさらされることになる。ランキングは毎週更新される。今C級の者には最短2週間でA級になるチャンスがある。逆にA級の者もサボっていれば最短2週間でC級になる可能性があり、さらに1週間で

首になる可能性もあるのだ。怠けないように。ヒーローとしての得点は、怪人等討伐の実績、戦闘能力、人助け等の社会的貢献度、を主な基準とする」

サイタマが合格した頃よりランキングに対する煽りが強いように感じた。数字で大衆の目を引きつつ、ヒーローの積極的な活動を煽るのが狙いだろう。

そして、講習終了。しかし第一回だけあってここからも長い。ヒーローと職員全員で記念撮影。マスコミ相手のインタビュ。子ども達との触れ合い。得意技のパフォーマンス。クロビカリなら重量挙げ、イナズマックスなら

回転蹴りだ。俺は巨大な岩を高く投げて受け止めるパフォーマンスをやった。

そんなこんなでヒーローとしての一日目終了。精神的に疲れた。

翌日は久しぶりにバングの道場に向かった。ガロウ無視のためにはできるだけだけ会わない方がいいが、さすがに就職報告はきちんとした方がいいと思っただけだね。

ヒーロー合格は、俺の前に先輩がバングに伝えていた。しかし俺が改めて合格を伝えるとき、バングはどこか寂しそうに「そうか。おめでとう」と言った。今日の夕飯はバングの驕りですぎ焼きのようだ。

久しぶりの修行。型の練習をこなしていると、ガロウから視線を感じた。俺はチラッと見てみる。彼は俺の方を見ながら親指を立てて、道場の外を指す。

闘おうぜ。久しぶりに。

そう言っているようだ。彼も競う相手がいなくて寂しかったのだろう。しかし、ここで応じてしまえば、わざとストレスを与えていたのが無駄になってしまう。

型の稽古の後、俺はガロウに近づいていく。

「すみません。受験なまりで心技体が万全じゃないんです。先輩の相手は務まりません」

「チツ。ふぎげやがって。何がヒーローだ」

ガロウはイライラを隠さず一人でランニングに出かけた。すまんガロウ。だが、これでいいんだ。たぶんな。

全ての稽古が終わり、すきやきパーティーの時間となる。俺以外にも就職が決まった弟子がいて、全体で就職祝いの宴会みたいな感じだ。肉が焼けた頃にはガロウもランニングから帰ってきた。

「しかし、チバよ。何故ヒーローのような楽な業界に逃げたのだ？ お前ならば格闘家としても十分やっていけるのに。スーパーファイトでも優勝してたじゃないか」

年長の先輩がふと聞いてきた。他の弟子達も急に静かになって聞き耳を立てていた。

ここでモテたいなどと言うと顰蹙を買うからな。適当にいいことを言ってやろう。

「私は、せつかく強くなつたので、それを人の役に立てたいと思ひまして。ヒーローはちようどいいかなあと」

「武道家のようにただ強さを求めるだけではダメか？」

「ダメとは言いませんよ。ただ、私にとっては、強さを求めるよりも人の役に立つことの方が重要に思えるのです」

「こいつめ、そういうのは武を極めてから言うんだな。まあお前より弱い俺が言っても説得力はないがな。はははははは」

先輩は自嘲するように笑った。そしてさりげなくバングの方を見た。バングは寂しそうだった。今の所、道場の二番弟子の俺。ガロウと共に道場を盛り上げるはずだった。しかし、俺がヒーロー側に興味を持ち、ガロウとの間の軋轢が増しつつある。その軋轢は俺がわざと広げているわけだがな。

バングは俺に何か声をかけようとして迷っている風だった。その時、俺の携帯電話が鳴った。ヒーロー協会からだった。

「チバくんか。S市に災害レベル鬼の怪人が出現だ。現地のヒーローが応戦中だが長くは持たない。早速向かって欲しい」

「はい、分かりました」

携帯をつけたまま、バングの方へ向き直る。

「すみませんバング先生。ヒーロー協会から緊急呼び出しです。人の命が関わることなのですぐさま駆けつけなければなりません」

「うん、そうか。行って来い。達者でな」

バングは急に武人っぽい顔になって俺を送り出した。ここで引き止めるほど狭量ではない。

しかしガロウは、あからさまに不機嫌になった。ライバルが道場よりもヒーロー活動を優先する。これはガロウ覚醒にとつていい不満になるだろう。

さて、災害レベル鬼との戦いは俺も初めてだ。正直恐怖も感じる。相性次第では殺されるかもしれない。

敵はビルをドミノのように倒して遊んでいる巨大なおっさんらしい。名前はピタゴラのおっさん。身長は30mくらい。マルゴリに比べたら大したことない。

「ピタゴラスイッチー！ ピタゴラスイッチー！ お父さんスイッチ『ド』！ ドミノ倒しー！」

現場につくと、バーコードハゲでスーツのおっさんがいた。おっさんは前世の教育番組っぽい言葉を口にしながらビルを並べ、倒して遊んでいた。

見た感じ動きは鈍い。メタボ腹で体力もなさそう。足腰も弱そう。しかもドミノ倒しに夢中でヒーローとかそういうのは全く気にしてない。

「だったらー！」

四足で建物の瓦礫を潜り抜けるように駆け、おっさんに接近。真後ろに来てもおっさ

んは気付かない。

「ピタゴラスイッチ」

ビルを持ち、ドミノを作るおっさん。俺は後ろでジャンプし、おっさんの膝裏目掛けて飛び蹴りを放つ。

「うわっ!?!」

決まった。膝かっくんの要領でおっさんは倒れ、勢いよく後頭部を打つ。

「ううっ、いたたっ」

さすがにこれでは死なないか。というかこいつ、殺さないといけないのか？ 悪の心とかは感じないが。ビルをドミノにして遊んでいるだけみたいだし。まあそれで一般人は死ぬから殺さないといけないかもしれないが。

おっさんが苦しんでいる間に、俺はおっさんの顔をよじ登る。

これだけの巨体。殺すなら弱点をつくしかなない。

「な、なんだあ？ ハエか？」

おっさんは顔について俺を振り払おうとする。

しかしそれよりも前に、俺はおっさんの目蓋に到達。すぐそこには眼球。急所だ。「気持ち悪いが、今の俺の実力ではな」

俺は眼球目掛けて、勢いよく拳を振りぬく。一度ではなく何度でも。

ぶちやつ。ぶちやつ。ぐちやつ。眼球の残骸、粘液の混ざった血が飛び散っていく。「んぎやあああああああああ！」

「おっさんは悲鳴を上げて暴れ回る。俺もおっさんの手に振り払われ、3キロくらい吹っ飛ばされてしまった。着地の時に瓦礫が体に当たり、複数の切り傷ができてしまった。道場の修業で若干皮膚が堅くなったが、まだ斬撃に対する耐性は弱い。」

「おっさんはしばらく暴れまわっていたが、不意に泡を吹いて動かなくなった。その後ヒーロー協会の科学班みたいな連中がやってきて、気絶しているおっさんの口に毒を流し込んでいた。えぐい。」